

越前守殿野○老中水御渡

御勘定奉行江

江戸大坂、今般上知相成候内向之ニハ、小身之輩も有之、代知爲請取可致出役家來ニも差支、又ハ是迄知行所賄ニ而融通いたし居候類ハ、當座不都合ニ可有之、或ハ代地手遠之場所江出候ハ、迷惑も可仕候ニ付、五百石以下代知之儀、當時御定之通、御藏前ニ引替可被下候、左候得バ、廻米難破船等之愁も無之、其外雜費相省、年中之世話迄も薄、自然家事之一助ニ也可相成事ニ候、委細御勘定奉行可被談候、

右之通、今般上知被仰付候五百石以下之面々江可被達候、

右之趣相觸候間可被得其意候、

今般上知相成候内向之内、五百石以下之分ハ、代知御藏米ニ引替被下候、尤多人數之内ニハ、是迄賄方等知行江申付置候族、右之通被仰出候ニ付ハ、當座迷惑ニ及び候類も可有之哉と、格別之思召を以、右引替相成候内向江ハ、御金可被下と之御沙汰ニ候、依之高百石ニ付金拾兩太平年表ニハ宛被下候、御金受取方之儀ハ、御勘定奉行可被談候、

右之通、今度上知被仰付候五百石以下之面々江可被達候、

右之趣相觸候間可被得其意候、

〔教令類纂初集五十九〕元祿十四辛巳年十月十三日

覺

小給之面々、知行所損毛ニつきて、返納米並上納金差延願之儀、知行高之内、何程損毛之旨、員數書付可被差出候、向後ハ相給之方よりも、右知行所損毛之段、書付取之、相給無之ハ、近邊御代官よりも書付取、相濟可被差出候、

十月十三日